

中國古代におけるかまどについて

——釜甑形式より鍋形式への變遷を中心として——

岡 崎 敬

一 明器にあらわれたかまど

こゝで古代というのは漢代より唐代までをさす。漢より唐にかけて器物や人物、動物の類を粘土でつくり、明器として墳墓中に副葬するならわしが盛んであったが、これらの明器泥象は當時の美術的造詣をうかがいしめるばかりでなく、生活の諸相をもがたる恰好の資料である。

いまこゝでとりあげるかまども、この二つの時期にわたり明器としてさかんに製作された。その大部分は瓦製、所によつては釉をほどこし、まれには青銅製品がもちいられた。これらは當時その地方でおこなわれたかまどを模したもので、その實物がのこっていない今日、畫像石、畫像磚

にあらわされたかまどとともに、生活を復原するにたる貴重な資料といわねばならぬ。いま出土の明器瓦竈に取材し、文献資料をあわせ考えながら、中國古代における炊さん生活の歴史をトレースしてみたいとおもう。

二 漢代の明器にあらわれたかまど

前漢の帝陵は秦始皇帝の陵の型制をおそい、後漢の帝陵は前漢帝陵の型制をさらにおそつたものであるが、兩漢約四〇〇年の間、厚葬の風は一般にひろがり、漢帝國の最東端であつた樂浪郡、最南端の安南郡の官僚層も、中原の墓制を模した壯重な墳墓をいとなんだことは近時の發掘のものがたるところである。

陝西、河南省の當時の京畿をはじめ、邊郡にいたるまで、かまどがひとしく瓦製品として副葬されているので、これらから各地域のかまどの形式を知りうるのである。

いま陝西省よりはじめて、各地の瓦竈をみていくことにしよう。

陝西省の例はかつてラウファー氏が西安府で蒐集したものである。この資料をもって“Chinese Pottery of the Han Dynasty” (1909, Leiden) をかいたのである。これらはいずれも出土の局地があきらかでない。かまどについてみると、馬蹄形 (those shaped like an elongated horseshoe) と、長方形 (quadrangular one) の二形式があり、縁釉をほどこしたものが少くない。ところが一九三三年春よりおこなわれた國立北平研究院の陝西省の考古學的調査において、寶雞縣鬲雞臺の漢墓から多數の瓦製明器が出土したのである。その墓室および出土品のもつとも完備したH12墓から共伴する貨幣からみて王莽新代のものと想定される。また内光花文明光鏡、内光花文清白鏡など前漢様式の鏡を出すものがあり、明器を出す漢墓群は前漢より王莽新、おそくとも後漢初期を下らぬ時期と考えられ

るK8墓では長方形と馬蹄形の二形式を出す。

前者は二つの釜

一つの釜には甑

がかゝる。甑は

五孔。釜と甑は

ろくろ製、かま

どの四周には菱

形格子紋をめぐ

らし、一端にた

きぐち、一端に

えんとつをつけ

ている。馬蹄形

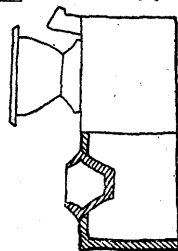
のものは、たき

ぐちの方が方形

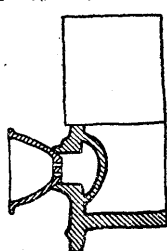
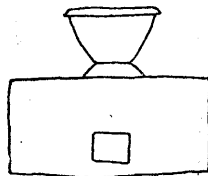
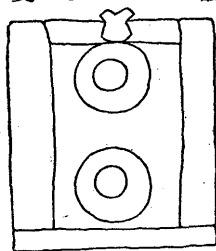
をなす。二つの

釜をかけ、一つ

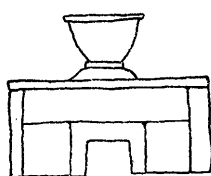
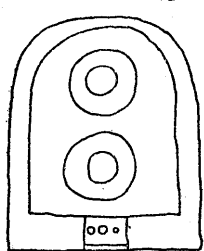
には甑をかけ



K8



K8



閼雞臺漢墓出土の瓦竈 (蘇秉琦『閼雞臺溝東區墓葬』より)

る。甗は五孔。釜甗ともにろくろ製。たきぐちの左には、
 女人が棒をもって坐っており、右にはつばをうき出し、か
 まどのまわりには雲文および渦文菱形文をめぐらしている。
 釜のまわりに鈎や杓をうき出している。H12墓のものはさ
 らに精巧である。たき口に女人像とつばをうき出す點、ま
 た鈎、杓などをうきだしている點は同一であるが、たき口
 に近い上面を四つの區劃にわかつて、鳥、串字形、魚、饅
 頭形、豚をうきだしている。釜は三個、甗は失われている
 が、釜はすべて口のせはまった形式である。H12墓出土品
 について報告者は「紅胎、紫紅色釉」といっているが、褐
 釉にほかならぬであろう。またこれらのかまどの周辺の文
 様は塙の文様と一致し、塙でできたものであらうとお
 もわれる。

ラウファー氏の蒐集品も、鬬雞臺出土のものとは、特長
 をひとしくしている。われわれはこのことから、陝西省で
 は、前漢代にすでに

1 塙をもってかまどをきすく。

2 長方形、また馬蹄形の二形式がある。

3 二ケ、もしくは三ケの釜をえんとつとたきぐちの間に

ける。

4 釜はいずれも

口のせはま

った形式で、甗

をのせるもの

がある。

5 明器としてき

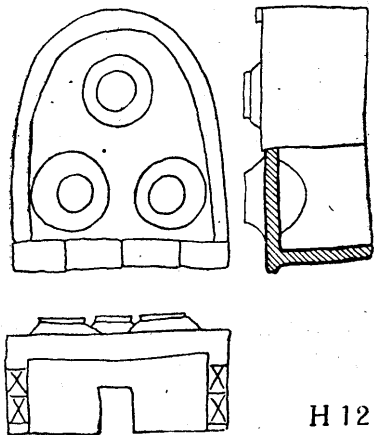
わめて精巧、

人物やつば、鈎、杓などのかまどの附屬道具や魚、鳥、

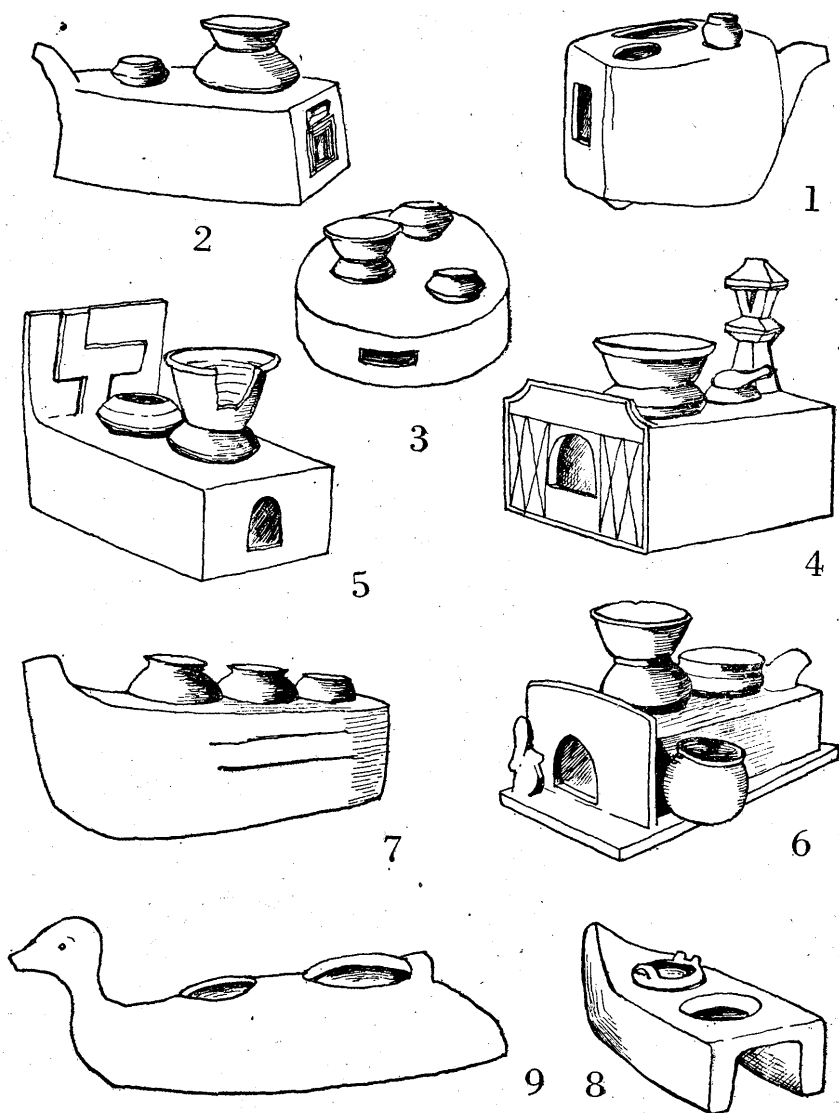
豚などをその上面にうきぼりし、釉をかけたものがある。

ことがいえるのである。

河南省も從來學術的調査をへたものはすくなくない。一
 九一七年榮澤縣²⁾で空塙をつんでつくった墓室からは鍾、鼎、
 博山爐などの銅器を模した瓦製品とともに瓦竈が出ている。
 ブックス氏によるとかまどは釉をかけていないが、釜と
 甗はいずれも釉をかけている。これでは二つの釜と一甗を
 かけ、後壁にうきだされたのはけむりだしであろう。伴出
 した重圈明光鏡ならびに穿上横文五銖錢³⁾がで、いるから、
 少くもこの空塙墓は前漢を下らぬといふべきであらう。ブ



第一圖 陝西省



第二圖 漢代墳墓出土瓦竈の諸例

1. 朝鮮樂浪南井里第53號墳(京都大學人文科學研究所藏) 2. 南滿洲蘆家屯(京都大學考古學教室藏) 3. 蒙疆大同附近(京都大學人文科學研究所藏) 4. 河南洛陽(文物參考資料1954年第9期) 5. 河南滎澤(F. Buckens氏による) 6. 廣東廣州先烈路(文物參考資料1954年第8期) 7. 浙江杭州老和臺(同上) 8. 安徽巢縣(同上) 9. 印度支那 Lien-Huong. Han-loc. Thanh-hoa(O.Jansé氏による)

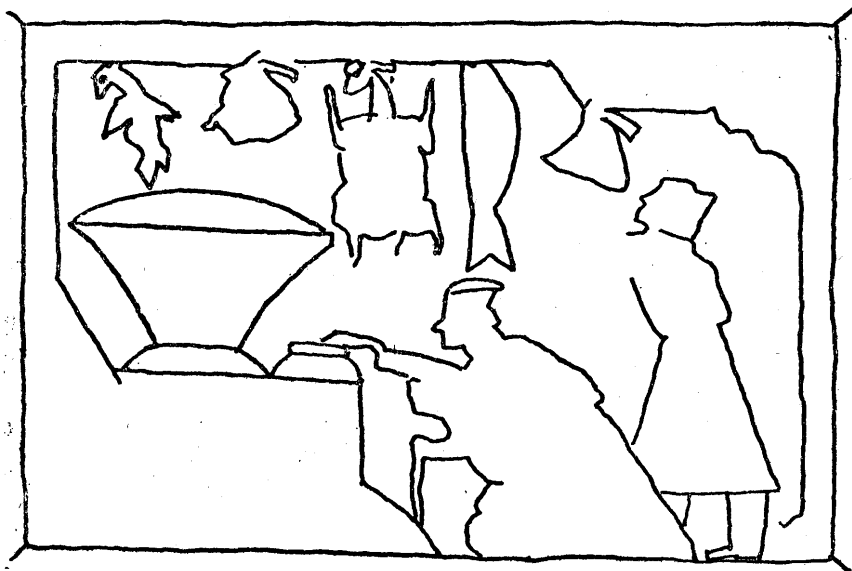
ックス氏が河南省で蒐集したもの、また近時中國の開發にともなつて出土したものなどをみて、さきにのべた陝西省のものと根本において一致するのである。

これが朝鮮樂浪郡、遼東郡などの漢墓の出土品になると、釉をかけたものがほとんどなく、製作も中原に比し粗末である。樂浪郡のものは、一九三三年、および一九三五年度の埽室墳の發掘⁴⁾で數例出土した。これは二個もしくは三個のかまど孔に釜をおき、甑をかけ、一端にけむりだしをつくることは、陝西・河南と一致するが、その表面がまるみをおびているのは共通の特長で、一九一六年發掘せられた大同江面第七號墳の出土品⁵⁾でも同様である。これはおそらく樂浪郡のかまどをそのまゝうつしているため、一つの地方性と解される。これにくらべて遼東郡、たとえば遼陽⁶⁾附近や南滿洲⁷⁾の漢墓のものはやゝ中原式にちかいが、製作はまづ釉をかけたものはほとんどみられない。中國では北は蒙疆地帯⁸⁾より浙江省、廣東省などで、次第にその例をくわえている。浙江省杭州老和臺漢墓⁹⁾出土品はかまどに釜を三個つらねている。けむりだしの部分はあたかも船首のようになっている。越州窯の中にこの形のかまどをかたどつた

ものがあるから、江南の地方色であるかも知れない。これにくらべると廣東省廣州東郊先烈路出土¹¹⁾のものは、中原式にまともまっている。これも釜甑一組をのせてをり、たき口に人物像をひねつておいていのはおもしろい。

現在出土しているものからみると、陝西、河南を中心として、東は朝鮮、南滿洲より、南は廣東省にいたるまで、當時の漢の版圖であつたところでは、ひとしく釜をかけ、その上に甑をおいて炊さんする。その使用法については後にくわしく説くとしても、その風景はまさに山東省の畫像石祠にみるものと一致するのである。

印度支那北部においても埽墓より家屋、圀形の瓦製品とともにかまどの瓦製品のあることがヤンセー氏 (Olov Jansé) によつて報告¹²⁾されている。けむりだしは鳥や動物の首をあらわしている。明器の副葬は漢の中原の風をおそつたものであることはあきらかである。たゞこゝでは Tho-dai (Onang-Xuông) IA 墓のように鍋形品の上に瓦甑がおかれているが、中原式の口のせばまつた釜の存在が明らかでない。兩耳のついた銅製、もしくは帶釉の鍋形品である。こゝでは中國式の釜甑の組合せはいまのところは



第三圖 山東武氏祠前石室畫像石にあらわれたるかまど

(Chavannes, Mission Archéologique dans la Chine septentrionale. 1909 による)

つきりしていない。安徽省巢縣漢墓の瓦竈には兩耳のある鍋形品がかゝっている。中國南部の漢墓出土品については將來さらに検討の必要があろう。また將來各地よりの出土をまっけて地方性などさらにあきらかにされるであらう。

すでにのべたように、前漢にはやくも陝西・河南省を中心として釜甑の組合せをもつ埴できすいたかまどが行われたのである。釜甑は主食を炊さんする原則的のセットである。この組合せは地域的にみると東は朝鮮、南滿洲より、南は廣東市西郊におよんでいるが、華北のものが基本的な形であり、各地域にそれ〴〵地方差をうんだことは疑いをいれない。後漢代より六朝にかけても、この釜甑様式のかまどがひきつゞき用いられた。たゞ六朝に入ってから資料がきわめて不十分なので、いまこれを漢様式のかまどとして論じることにはしたい。

三 漢様式の炊さんのかたち

さて明器にあらわれたかまどをみると、かまどに釜をかけ、さらにこしきをかけているのが一つの通性である。山東武氏前石室の畫像石をみると、やはりたきぐちとけむり

出しの間に二つの釜をかけ、一つは甑がかゝり、さらにふたをかぶせる。たき口にちかい釜は人物がその上に杓をもつ。かべには鳥・牛首・鳥・魚・豚首などがかゝっている。この種の畫像石はほかにもみられるが、これはまさしく厨房をうつしたものであつて、鬲雞臺H12墓の瓦竈は厨房をかまどの上に投影したものであろう。

釜甑が主食炊さんの形式であつたことは、漢代の文献にしばしば出てくる。

史記卷七、項羽本紀には

當陽君蒲將軍みな項羽に屬す。項羽すでに卿子冠をころす。軍威、楚の國にふるい、名諸侯にきこゆ。すなわち當陽君蒲將軍、卒二萬をつかわす。河をわたり鉅鹿を救う。戦利すくなし。陳餘また兵を請う。項羽すなわちこことく兵をひいて河をわたり、みな船をしづめ、釜甑をやぶり、盧舍をやく。三日の糧をもつて、もつて士卒に必死にして、一にかへる心なきを示す。

とみえる。つまり文字どおり背水の陣をしいて戦つたわけであるが、船をしづめ、釜甑をこわし、屋舍をやく。釜甑は炊さんのための具で勝たずんば二度と炊さんせずという

決意をしめしている。これと同じ表現は後漢書卷四十四、齊王縉傳にもみられる。

王莽納言將軍嚴尤、秩宗將軍陳茂、卓賜の軍敗れしことをきゝ、ひいて宛によらんと欲す。伯升すなわち兵を陳ね、衆に誓ひ、聚をやき、釜甑をやぶり、鼓行してすゝむ。

つまり軍隊の携行品に釜甑があり、時に應じ、かまどをきすいたものであろう。

釜甑を釜鑪とも熟字する例がある。後漢書卷四和帝紀に

永元五年(紀元九三年)二月丁未詔して曰く、

去年秋麥入ること少し。民の食たらざらんことをおそる。……さきに郡國上すらく「貧民、衣履・釜鑪をもつて貲となす。しこうして豪右その饒利を得」と。

鑪の音は尋、『方言』によると「甑は〔函谷〕關より東はこれを鑪という」とみえるから、釜甑にはかならぬ。淮南子

道應訓に 太平御覽
七百五十七所引

太王亶父、邠におる。狄人これを攻む。策を杖して去る。

百姓釜甑を負い、梁山をこえて岐に國す。

〔清武進莊校本
には釜甑のか
わり民相連而從
之となつてゐる〕

とみえる。この表現でみると一般百姓にいたるまで釜甑のかたちで炊さんしたことをしめす。

後漢書禮儀志では皇帝の副葬品目録がある。

東園武士、事を執り明器を下す。筥八盛容三升。黍一、稷一、麥一、粱一、稻一、麻一、菽一、小豆一、麴三、容三升、醯一、醢一、屑一……瓦竈二、瓦釜二、瓦甑一、瓦鼎十二、容五升、匏勺一、容一升、瓦案九、瓦大杯十六、容三升、瓦小杯二十、容二升、瓦飯槃十、瓦酒樽二、容五斗、匏勺二、容一升。

通典卷八十六には晉の明器について晉賀循の文をひいてゐる。

其明器、憑几一、酒壺二、漆屏風一、三穀三器、瓦唾壺一、脯一簋、屨一、瓦罽一、屨一、瓦杯盤杓杖一、瓦燭盤一、箸百副、瓦奩一、瓦竈一、瓦香爐一、釜二、枕一、瓦甑一、手巾、贈幣玄三、纁二、博充幅長尺、瓦爐一、瓦盥盤一

これでみると瓦竈一、釜二、瓦甑一をもちいている。晉代にも釜甑形式をもちいていたことがうかゞわれるのである。漢代より六朝にかけて宮廷より百姓にいたるまで、また

軍陣の間にあっても釜甑が用いられ、衣履釜甑が必要缺くべからざる最小の生活水準であったのである。

いま釜甑およびその附屬品についていさゝか訓詁をこゝろみよう。

* * *

釜 かまどにかゝった實例からみると、漢代の文獻にいう釜は口のせばまった、今日の日本の茶釜にちかいものである。『方言』では「釜は關より西はあるいはこれを鍔といふ」とみえるが、『説文』では鍔を「釜の如くして大口なるもの」といつている。釜、鍔ともに金偏に従っているが、『説文』には「鍔は鍔の屬なり」とみえるから、土製のものは鍔とよばれたものであろう。甫、父ともに音通であつて、土製のものが金屬化するにしたがい、釜鍔の字が用いられるようになったものと考えられる。漢代では、謝承後漢書太平御覽卷七五七所引に

潁川尹馮遷、徐州の刺史となり、小銅釜甑をもつて十日に一炊す。

とみえるように、銅製品もあつたようである。朝鮮樂浪郡石巖里第九號墳¹⁵⁾、陝西鬲雞臺J12墓¹⁶⁾の出土銅鍔や、漢漁陽

郡孝文廟甗¹⁷⁾の如きものからその形をうかゞうことがで
るが、たゞこれらは祭祀の器として鍾鼎とともに行われ、
在來の甗にかわつたものである點、注意すべきである。い
ゝかえれば、殷周よりの傳統的な銅器の種類中に甗にかわ
つて釜(鍔)甗形式が出ることはかまどの出現を意味するも
のであらう。

鬲雞臺 A 5 墓 H 12 墓では鐵釜¹⁸⁾が出てゐる。前者は口徑
七・七センチ、腹徑一一・〇センチ、高さ八・七センチ、後
者は口徑一〇・八センチ、腹徑一九・二センチ、高さ一三・
六センチの鑄造品である。これらは充分實用にたえうるも
のである。

たゞ後にのべるように、後代では釜の意味がひろくつか
われて、鍋狀のものもふくめられる場合があるが、漢代の
釜は口のせまくなった形式のものと考へては差支えない
ようである。

甗 甗の字は、甗が釜にかわつても、永く瓦偏にしたが
つてゐる。つまり土器であつたのである。漢代の遺蹟より
甗形土器をみいだすに苦しまない。その形は鉢形土器の底
に數個乃至十數個穿孔し、釜にかけるのである。

『錄異傳』太平御覽卷
七五七所引に

隆安中(紀元三九七—四〇一)、吳縣の張君林、忽ち鬼來
るあり、其の驅使をたすく。林家の甗破れて用うべから
ず。鬼すなわち盆の底を撞き、穿ちてもつて甗に充つ。
隆安は東晉安帝代の年號である。盆にあなをあけたとい
えば、土器で代用したものである。

『郭林宗別傳』同上
所引に

鉅鹿の孟敏、太原に客たりしとき、甗をおとしてかえり
みず。林宗みてこれに問う。こたえて曰く、甗すでにや
ぶれぬ。これを視るも益なしと。林宗その分決をもつて、
すゝめて學ばしむ。はたして美士となる。

甗はどうもこわれやすいものらしい。居延地方より發見さ
れた後漢代の木簡によると、釜禮は官給品として屢々みえ
るが、甗はみえない。おそらく甗は消耗品としてとりあつ
かわれたのであらう。

甗には釜とおなじく銅製品のあつたことは、先にひく額
川尹馮遲謝承後漢書のほか、晉の陳壽の益都耆舊傳太平御覽卷
七五七所引に

任文公、王莽の變あるを知り、ことごとく奇物を賣り、
たゞ銅甗衰笠のみを存す。

とある。その表現は、後漢書和帝紀の「衣履釜鬻」と同様で、生活用品の最低水準を意味している。

竈 釜鬻だけではいまだ完全でない。鬻は底にあながあいているので、そこには竈つまりすのこをしいたのである。

『世説』夙慧篇に

賓客、陳大丘(寔)にいたりて宿す。大丘、(その二子)元方・方季をして炊かしむ。客、太丘と論議す。二人火を進め俱に委してひそかにきき、炊くに竈をおくをわする。飯、釜中におつ。太丘問う、飯何ぞ餽せざると。元方・季方長跪して曰く、大人客と語る、すなわちともにひそかにきき、炊くに竈をおくをわする。飯、いま糜となれりと。

飯は「こわめし」であり、糜は「べためし」である。粥は米すくなく、さらにやわらかきものである。『世説』のはなしは袁山松後漢書 太平御覽卷七五七所引に

荀淑、陳寔と相善し。官を棄て常に駕を命じて相就き、元方をして側に侍せしめ、季方をして食を作らしむ。かつてある朝、食遅る。

季方ひざまづいて曰く、さきに大人の荀君^なと云るを聞き

をりしに甚だ善し、よってひそかにこれを聴けり。鬻こわれ、飯糜となれりと。

とみえるはなしと同源であろう。後者では鬻がこわれたことになっているが、前者ではすのこがおちたことになっている。

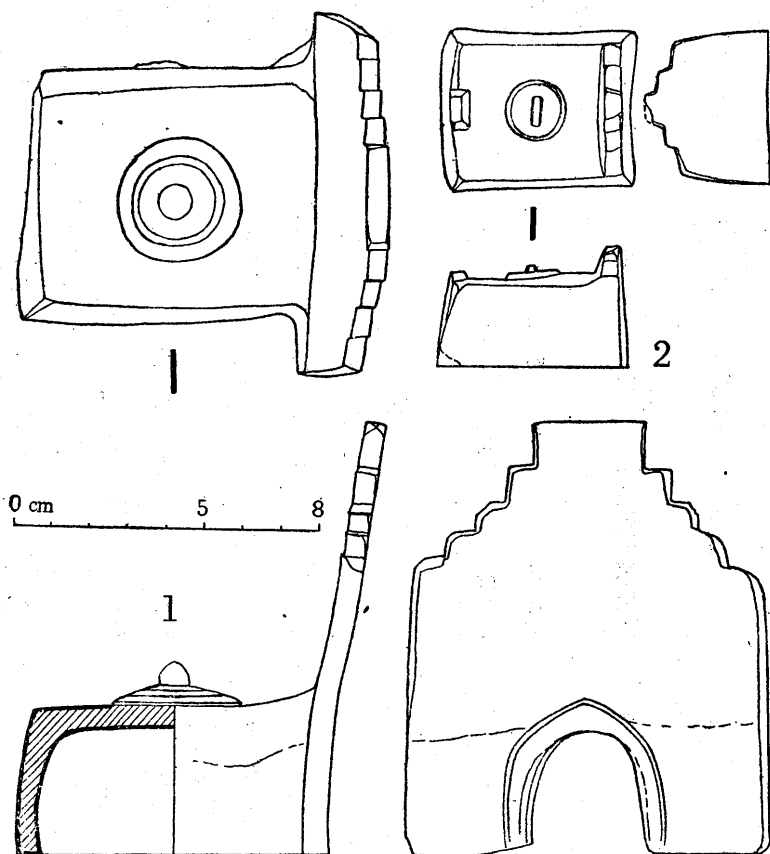
釜に水をそそぎ、竈に竈をしいて、穀物をその上におき、ふたをする。かくてかまどに火を投ずるのである。

四 唐代の明器にあらわれたかまど

唐代の墳墓は漢墓にくらべ、學術的調査をみたものはきわめて寥々たるものである。しかし清末汴洛鐵道が開設せられた際、唐代の明器泥象が多く出土し、わが國にも舶載されたものがすくなくない。唐代は人物、動物の像が大部分をしめ、漢代にくらべて器物の種類が比較的すくない。

しかしかまどの瓦製品のあることは、ブッカン氏の紹介した河南府の北F墳の一括遺物²⁰⁾などからみてあきらかである。

唐代のかまどは一般に小形である。いま京都大學文學部考古學教室の所藏品を例にとって説明しよう。これらの出土地點ははっきりしないが、河南省、陝西省のほかに遠く



第四圖 唐代の瓦竈 (京都大學文學部考古學教室藏)

はもとめられない。(1)はことに白色の胎土で透明釉がうすくかゝり、河南とする推測をふかめるのである。(1)はたか

さ十一センチ、凸字形の壁の下にアーチ状のたき口がある。(2)は底長八・二センチ、これは凸字形の壁があり、これ

はたき口が略され、一方に煙出しとおもわれる突起がある。これらはいずれもかまどの中央に一個蓋の部分がみえる。これは釜甑ではない。いわば鍋に蓋をかけているのである。

現在私のみた唐代の瓦竈とおもわれるものゝ大部分は蓋のみである。これは主として陝西・河南の支配層の厨房のかまどをうつしたものである。そうすると、唐代の兩京附近では鍋を一つおくのが普通の形式であったといわなければならぬ。

鍋 唐代瓦竈にかけられたものを今日いう鍋として、それを唐代においてもはたして鍋とよんだであろうか。

わが源順の『倭名類聚抄』に、『唐

式』を多くひいているが、そのなかに次のようにみえる。

唐式云、鐵鍋、食簞各一。

これはどこの裝備目録であるか、わからないが、これが炊さん道具であることは、下の食簞と一しよにしてあるところからいえる。

唐會要七十二「府兵」條に

天寶八載五月九日、折衝の上府、魚書を下すを停む。兵交うべきなきをもつてなり。末年に至り、折衝府は但兵額あるのみにして、其の軍士、戎器、六駄、鍋、幕、糗糧並びに廢せり。

とみえている。これで見ると盛唐時の軍隊は鍋を携行していたのである。漢では釜甑を用いていたことをおもうと、文字どおり大きな變化である。

敦煌文書 (Collection Pelliot No. 2685 燉煌掇瑣中輯) には

……釜、壹口受(九斗)一斗五勝、鍋一勝半、靈頭鑑子壹、鐎壹孔、鎌兩張、鞞兩具、鐙壹具、被頭壹、剪刀壹、切壹、鉞壹張、馬鈎壹、碧絹壹丈、梁尺、黑自牛壹半、蓆草馬與大郎鑊具壹……

とみえる。この鍋は釜と鑑子の間にかゝれているからやはり、なべであろう。たゞこれで見るとさほど大きなものはおもわれない。

さて漢代においては釜甑がかまどにかゝる一般の形式であり、後漢書禮儀志大喪、および通典^{卷八}十六にひく晉賀循の文よりみて、瓦竈にかゝるのは釜と甑であった。しかし鍋の字を見出すことがついにできなかったのである。

『説文』には鍋の字がない。そのかわり鍋の字があり「盛膏器」としてみえる。殷氏注には過、輶、鍋の三字は同じで、輶は車の盛膏器としてゐる。『方言』では「車釭は齊、燕、海岱の間これを鍋といい、あるいはこれを鋸という。關より西はこれを釭という。膏を盛るものをこれを鋸という」とみえる。つまり鍋は關西すなわち長安附近では「膏をもる器」、關東すなわち河南省では「車釭」を意味したのである。『玉篇』(いま『大廣益會玉篇』にしたがう)では、「鍋」は「古和切、車缸盛膏者、又枋車收系具」(第六)、「鍋」は「古和・公禍二切、車缸盛膏器」(第十八)とあるのは、漢代の意味をうけついでいるのである。

かくて漢六朝における「鍋」の意味と、唐代になつての

「鍋」の意味がことなっていることに注意しなければならぬ。唐代に入ってはじめて「鍋」が煮沸具としての意味をもってきたといわねばならぬ。

さて鍋は釜甑とことなり、少くも穀物をむすだけのものではない。直接にたくこともでき、油でいため、また油であげることができ、ひろい使用のはゝをもっている。しかし蒸食用の甑はこれですたれたのではない。

杜牧の自撰の墓誌〔樊川文集卷第十〕に

「今歳十月二日、奴順來りていう。炊まさに熟せんとするに、甑裂れぬと。予いわく不祥なりと。」

この材料にはなにを用いたであろうか。康駢の『劇談錄』卷下白傳乘舟の項に

舟の後に、小竈あり、桐甑²¹⁾を安せて炊く。

とある。これを見ると桐のこしき、いわばせいろうである。漢様式の土器形式の甑は底が小さく、それをうける釜は必然的に口のせばまった形になるが、せいろうであれば鍋でもさしつかえない。現在華北では鍋の上に木の枠のせいろうをおく。また飯は一度たいたものをさらにむすを尙ぶというから、唐代では鍋であっても充分飯をむすことが可能

であるのである。こうしてみると鍋は従来の漢様式の釜甑に比して一つの器で多くの用途にたえうるといわねばならぬ。

* * *

さて唐の明器にあらわれるかまどが當時のかまどをうつしているとするれば、鍋が使用せられたのである。またこしきも土器より木製品に轉化した。中國ではこの後、鍋が炊さん用具として重要な役割をしめることになった。もとより釜甑形式が鍋形式に推移するのは一朝のことでない。また所によって釜甑とも土器の用いられた地域がながくつき、釜形式と鍋形式が併用されることがあったが、全體として鍋形式にうつてゆくのである。

明代の『天工開物』八、鑄造の項に²²⁾

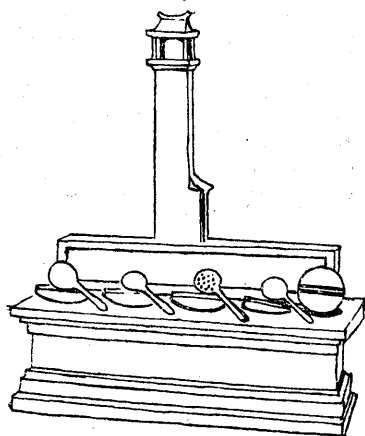
釜は水をいれて火にかけるもので、日々の食事に缺くことのできぬものである。鑄造するには生鐵か、または廢物になった鑄物の鐵器を材料に使う。大きさは一定しないが、普通に使うのは口徑二尺を標準とし、厚さは約二分である。小さいものは口徑がその半分であるが、厚さは變らない。

とみえる。この圖にのせる釜というの、あきらかに鍋^{なべ}であり、またその口徑から考えて鍋とするほかはない。

明史禮志、明器の項に

「初め洪武二年（一三六九年）敕して開平王常遇春を鍾山の陰に葬る。明器九十事を給し、これを墓中に納む。：
鉦二、鼓四、紅旗、拂子各二、紅羅、蓋鞍、籠各一、弓二、箭三、竈、釜、火爐各一、俱に木をもってこれをつくる。」

とみえる。こゝでも竈、釜がある。『天工開物』の例からみても鍋と考えられるのであるが、これを傍證するよい例があるのである。それは南京西善橋で發見された明景泰七年



第五圖

南京西善橋出土の明太監金英墓
(十1456)の明器銅竈

(『文物參考資料』1954年第8期より)

(一四五六六年)に歿した司禮太監金英の墓より出た銅竈²³⁾(第五圖)である。これは長方形のかまどに五個の鍋がかゝり、杓が配してある。かくて禮志にいう釜も鍋とみて差支えないであろう。つまり鍋は俗にいうことばで釜を用いたのであろう。現在の中國では炊さんに鍋を用うのが通例であるが、唐代のかまどは現在わかつているこの點一つの先承というべきである。

五 釜甑より鍋への推移についての

基礎的問題

(1) 煮沸形態の材料について——土器より金屬器へ——

漢様式のかまどについてみると、釜甑の二者のくみあわせからなる。これは下の釜に湯をわかし、上の甑に穀物をいれてむすのである。甑は漢代では土器であり、深鉢形を呈するのである。この二つの組合せは中國先史土器以來の傳統である。彩陶、黑陶においては粗製の土器が日常に用うる煮沸用の土器として用いられた。河南不召寨の遺蹟²⁴⁾では、直接火にあたる三脚の土器(鬲)の上に底に孔をうがつた甕形の器(甑)がくみあわさる。鬲と甑のくみあわせは黒

陶においても用いられるし、殷墟からも出土している。

この甬が盛んに用いられることは、固定したかまどの存在を積極的には證明しない。つまり甬は一ヶ所で炊さんするものでなく、また長期の使用にたえるものでない。甬の消滅した時期にかまどがきずかれていた可能性がある。火にかゝる土器は長期の使用にたえ得ない。したがって金属器であることが當然要求せられるのである。このためには銅もしくは鐵の鑄造技術の發達および、その大量生産の可能性を前提としなければならぬ。しかし金屬化の可能と普及とともに甬—甗—釜という煮沸器の系譜が成立するのである。

甗は直接火にかゝる部分でなく、また必要があれば土器に底をうがって代用しうるのである。土器の底は普通十センチ前後であるから、それをうける釜も必然的に口がせまくなるのである。漢代の釜甗の形態はかゝる條件に規定されたのである。蒙疆萬安北沙城²⁵⁾の調査からみると、前漢代ではこの地方はいわば甗甗の組合せである。漢代より六朝にかけては土器の甗が金屬器の釜に、ことに鐵製品にうつりゆく時代である。この普及の状況は現在充分に明らかに

することが出来ないが、北魏の時代に編纂された『齊民要術』には鐵釜のかなけぬきのことなど詳細に記されているから、このころには一般に普及していたとみるべきであろう。

さて土器にかわって、金屬器で炊さんをはじめることになると、直接にこれで行くことが可能になってくるのである。甗も必ずしも必要でなくなる。底の小さい甗を上にする漢様式の口のせまい釜は不便なためすたれ、口がひろがってくる。ことに、鍋でもせいろをおくことが可能であるから、釜甗という漢様式の炊さん様式は材料の變化によつて、衰滅する運命をになうといわなければならぬ。

(2) 主食穀物について——粒食と粉食——

かまどにおける炊さんの場合、主食穀物の問題を缺かすわけにはいかない。釜甗の形式は穀物をむすに便なるもので、いわば粒食である。漢代の中原地帯では主として粟、大麥を産し、また前漢代西北邊境の兵士の食糧は使用量においては粟が、使用回数においては粟・麥が多いことがあきらかにされている。²⁷⁾この麥というのは大麥を主としてさすようで、小麥と明記したものは二例にすぎない。しかし

後漢では、「和帝」永元五年、六年官釜礪月言簿²⁸⁾では礪を用いており、これで小麥を粉にするものとする、粉食がおこなわれていることをしめす。中國内地では礪礪²⁹⁾をしめす明器は少なからず出土してをり、南滿洲南山裡塋墓³⁰⁾では瓦製礪礪²⁹⁾が出、樂浪土城址からは石製礪礪³⁰⁾がでてゐる。

こゝで注目されるのは、わが東亞考古學會が壹岐でおこなった考古學的調査で、彌生式遺蹟から小麥が出土したところである。一九五二年では同島鯨伏村カラカミ遺蹟³¹⁾で、さらに一九五三年には田河町原ノ辻遺蹟の竪穴住居址より確例を採集した。ともに彌生式中期の土器を出す、カラカミ遺蹟は同層より樂浪郡において用いられたと同式の漢式土器³²⁾つばが出土している。これらの年代はほぼ前漢末より後漢の前年と考えられるから、後漢代にはすくなくも日本まで入っているのである。壹岐の場合はすりうすがないから積極的な粉化が考えられないが、漢代では、居延、遼東、樂浪の邊郡にさえ礪礪がある、小麥の粉化は當然考えられるのである。説文に「麴は麥の屑末なり」というのは小麥粉であらう。しかしかまどのしめすように小麥の粉食はいまだ一般的なものでなく、粟、麥の粒食が漢代では普

通の形式であつたのである。小麥の普及過程ならびに粉食の普及の詳細は將來の問題に屬するが、唐代においては小麥がきわめて普及していることは礪礪³⁴⁾に水力を利用し、また敷基ならべており、豪族、寺院などがそれを盛んに經營していることからうかがわれるのである。『舊唐書』卷一八高力士傳に、

「京城の西北で、澧水を截つて礪をつくり、五輪を並輾して日に麥三〇〇斛をつくる」

とあるのは、その一例にすぎないが、これは長安をはじめとして粉食が盛んにおこなわれたことを前提とせずには理解できないであらう。青木正兒博士によれば、³⁵⁾唐初、則天武后時代の韋巨源が尙書令に拜せられた際、宮中に献上した食品五十八種の目録、及び隋朝の有名な料理通謝諷の「食經」の目録五十三種についてみるに、餅の類が多いことをいっている。餅は小麥粉をこねて焼いたり、蒸したり、煮たり、油であげたりしたものであるから、主食調理の形が、きわめてヴァリエティにとみ、漢樣式の釜飯³⁶⁾だけでは不便であり、かえって鍋は粟、麥、米などの粒食のみならず、小麥の粉食、ことに餅の調理、その他副食の調理にま

で一つの形式で多くの用途をはたし得るのである。もとより釜形式および釜の字の使用はこのことによって消滅したのではない。鍋形式が民間にもちいられるようになったのではない。鍋形式が釜とよんだことは、『天工開物』においても、かえってこれを釜とよんだことは、『天工開物』における例よりあきらかである。

* * *

主食における釜飯より鍋への炊きん様式の變化には、大きくいって以上の二つの原因があろう。この場合上流の階層は比較的是やく、金屬器の釜ならびに鍋を知り粉食を採用したものであろうが、それが一般に普及する間、また地域によって、さまざまの變差とくみあわせをみせるものとおもわれる。しかし鍋形式は次第に民間に浸透し、日常かくべからざる炊きんの器として愛用され、今日にいたったというべきであらう。(昭和三十年二月)

補 記

1 本稿において、漢様式(釜飯)と唐様式(鍋)のかまどを對比したのであるが、その變遷の具體的な問題にはいふおよばなかった。しかし漢より唐までの間、鐵製品

普及、主食作物の變化にともなつて、從來の器具(炊きん道具また農具をふくめ)のみでは不便が多かった。こうした器具の改良は一般の要求に醸成されるので、發明改良の時代があるものである。われわれはこの點で晉の杜預の事蹟をわすれることができないようにおもわれる。かれは春秋左氏傳の註解者として有名であるが、河南尹、安西軍司として、また南征の武將として功あつた人で、左傳集解は功なり名とげて後の作品である。泰始中かれは河南尹であつた。かれは「京師は王化の始、近きより遠きに及ぼす」をモットーとして政治をおこなつてゐる。『太平御覽』七百六十二にひくところによれば、

杜預、元凱、連機の水碓をつくる。これにより、洛下の穀米、豐賤なり。

というから、これは河南尹の時であつたとおもわれる。杜

預奏事 太平御覽卷七五七所引 には

藥、杵臼、澡槃、熨斗、釜、釜、銚、鐺、鍬、はみな民間の急用なり

といつてゐる。かれはこれらの改良には意を用いていたらしく、釜の例として、晉諸公讃 太平御覽卷七五七所引 に

尙書杜預、平底の釜をつくらんと欲し、薪火に省なりという。黃門部賈彝、世祖の前面において、預に質していう。釜の尖下なるは、沃洗にそなふるなり。今もし平底ならば、もって水を去るなしと。預も亦これを折く^くあたわす。

かれの意圖するところは、釜の底を平たくすれば、燃料が節約できるというにある。沃洗にそなうという意義がいま一つ明らかでないが、かれの改良案は賈彝によつて葬りされてしまったようである。しかしその後の釜より鍋への發達は彼の平底案が決して理由のないものでないことをしめしている。

杜預はこの他治水對策、農業對策にも、すぐれた手腕を發揮しているが、かゝる實學的、科學的な面をもっていることは、その時代の要求とともに注意されていゝとおもう。

2 本稿は一九五〇年、九州大學文學部東洋史研究會で、ほゞその構想をはなしたものである。その後、人文科學研究所の研究班および日本考古學協會の研究發表で、ほゞまとまった考えをはなしてみた。このころまでは、考古學的資料としては戦前に發掘され、報告された資料によるほか

はなかった。ところが新中國の成立以來、各地の建設事にともない、おびたゞしい考古學的資料が出土し、そのなかには漢代より唐代の明器泥象が少くない。貝塚教授の帶歸され、ひきつゞき近着する『文物參攷資料』には、每號をにきわしている。本稿にのべた構想は變改を加える要はないけれども、これらの出土瓦竈によつて各時代をさらに決定しうるばかりでなく、また從來不分明であつた中國内地のかまどの實態および地方差をさらに明らかにすることができるようにもわれる。本稿はそれまでの下準備にすぎぬことを考えるのである。なお本稿を草するにあたり、森鹿三教授、天野元之助講師および入矢義高助教授が多くの示唆をあたえられたことを銘記し、さらに將來にそなえたいと思う。

註

①蘇秉琦「關雞臺溝東區墓葬」國立北平研究院史學研究所陝西考古發掘報告、第一種第一號、北平一九四八年刊、このなかの漢墓については筆者が紹介したことがある。

岡崎敬「陝西省關雞臺の漢墓」(『中國明器泥象』所收)一九五四年刊。

②Fernand Buckens "Les Antiquités Funéraires du Honan Central" (Mélanges chinois et bouddhiques publiés par

e'Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises, Huitième
volume : 1946-1947) Bruxelles, 1947

- ③ 梅原未治「河南鄭州及び榮澤縣發見の漢代の墳墓と其の遺物」
(東洋學報 第一九卷第一號) 一九三一年
- ④ 貞相里第二一九號墳、第二二七號墳については『古蹟調査概報』
(昭和八年)に、石巖里第二五五墳、南井里第五三號墳について
は『古蹟調査概報』(昭和一〇年)に梅原博士が報告している。
- ⑤ 關野貞『樂浪郡時代の遺蹟』本文一九八頁古蹟調査特別報告第
四冊 一九二七年。
- ⑥ 漢の遼東郡治、つまり襄平縣治が、いまの遼陽附近にあること
はうたがいをいれないところである。遼陽附近の漢墓はふるく
鳥居龍藏博士がしらべられたが、昭和十六、十七年ならびに十
九年にわたり、原田淑人・駒井和愛博士らが發掘調査された。
石漢墓と塚室墓の二形式があるが、いづれも瓦製明器を出し、
かまどもふくまれている。第二號塚室墓發見のものは上面に大小
五つの釜孔があり、これと併出した釜甑の類はもと孔の上にか
けてあったと推定される。
- 駒井和愛『遼陽發見の漢代墳墓』(『考古學研究』第一冊) 一九
五〇年、圖版十四。
- ⑦ 遼東半島突端部、元關東州地方の漢墓は牧城驛における濱田博
士の調査をはじめとして牧羊城を中心にする南山裡の一群と、
董家溝を中心とする一群の調査が公けにされている。
- 『南山裡』南滿洲老鐵山麓の漢代軛墓——東方考古學叢刊 第三冊
昭和八年
- ⑧ 蒙疆懷安漢墓の出土の細金細工はあたかも瓦甕の如き形である。
水野清一、岡崎卯一『萬安北沙城』(東方考古學叢刊 乙種第五
冊) 一九四六年圖版六九。蒙疆陽高第二十二號墳出土の瓦甕と
ちかい。陽高は代郡、懷安は上谷郡にあったものと考えられる。
大同附近採集の瓦甕(京都大學人文科學研究所藏、第二圖3)
はほとんど圓形をなし、三釜をかけ、一釜に甑をのせている、陽高
も釜をのせており、いづれも釜甑形式であることはうたがいを
いれない。
- ⑨『文物參攷資料』一九五四年第八期 圖三十九
- ⑩ たとえば天理參考館所藏のものがある。
- ⑪『文物參攷資料』(前掲書) 九二頁 圖十五。
- ⑫ Olov Jansé: Archaeological Research in Indochina. Volume
I. Harvard University Press, 1947.
Lach-tru-ông (Hân-lôc) 第三號墓、第七號墓のように甑があ
ることはあきらかである。たゞ華北にあまりみない兩耳の鍋形
品の多いことは注意される。
- ⑬『文物參攷資料』(前掲書) 圖二十六。
- ⑭ E. Chavannes: Mission Archéologique dans la Chine
septentrionale. Planché. 1909, No. 117
- ⑮ 關野貞「樂浪郡時代の遺蹟」(前掲)
- ⑯ 蘇秉琦「關雞臺溝東區墓葬」(前掲)
- ⑰ 谷庚「漢代服御器考略」頁四四(燕京學報第三期)
- ⑱ 蘇秉琦「關雞臺溝東區墓葬」(前出)
- ⑲ 漢代の墳墓以外の生活遺址については、いまだ充分なるべき調
査がない。しかし甑の大部分が土器であることは、うたがう餘
地がない。

②⑧ Fernand Buckens, Les Antiquités funéraires du Honan central et la conception de l'âme dans la chine primitive. (Mélanges chinois et bouddhiques) pl. XXVI

②⑨ 唐語林卷四栖逸篇にひく劇談録では銅甕となつてゐる。「學津討源」、「嘯園叢書」本などでは桐甕となつてゐて、桐甕のあやまりではないかとおもう。

②② 藪内清編『天工開物の研究』(一九五三年) 三〇〇頁

②③ 『文物參考資料』一九五四年第八期

②④ 李濟「殷商陶器初論」五二頁(安陽發掘報告一)

②⑤ 水野清一、岡崎卯一『萬安北沙城』(東方考古學叢刊 乙種第五冊)、一九四六年第二十二圖 XXXIX-2 は外底には煤の附着したものである。煮沸の用にあつたものと推定している。第二十圖には甕の底がある。これらの土器のなかには「木亭」という刻印があり、すくなくも前漢を下らぬものとかんがえられる。

②⑥ 『齊民要術』醴醢第八十五、治釜令不滌法「常於諸信處買取。最初鑄者、鐵精不滌、輕利易然。其滌黑難然者、皆是鐵滓鈍濁所致。治令不滌法、以繩急束蒿、斬兩頭令齊。著水釜中、以乾牛屎然釜湯煖、以蒿三遍淨洗抒却。水乾、然使熱、買肥猪肉脂、合皮大如牛者三四段、以脂處偏揩拭、釜發作聲、復著水、痛疎洗、視汁黑如墨、抒却、更脂拭疎洗。如是十徧許、汁清無復黑、乃止、則不復滌。」

②⑦ 米田賢次郎「漢代邊境兵士の給與について」(京都大學人文科學研究所創立二十五週年記念論文集) 一九五五年、一四四頁、國境の兵士たちに康給する食糧は麥、大麥、小麥、粱、穄、黍、糜、粟、糜のうち、穄、黍、粱、糜がとくに多い。小麥についてゐるものは二簡にすぎず、木簡の年代(前漢末より後漢初)には普及してゐたといふがたいと考えられる。

②⑧ 「廣地南部言、永元五年六月官釜磬月言簿、承五月餘官弩二張、

箭八十八枚、釜一口、磬二合、今餘官弩二張、箭八十八枚、釜一口、磬二合、毋入出。

具弩一張、力四石木關

陷堅羊頭銅鏃箭卅八枚

故釜一口、鋤有鋤口呼長五寸

磬一合、上蓋缺二所、合大如疎

● 右破胡陳兵物……以下略

②⑨ 『南山裡』(前出) 圖版第三十一

③⑩ 東京大學文學部考古學研究室藏

③⑪ カラカミ遺蹟の小麥出土地點には原ノ辻上層式、原ノ辻遺蹟堅穴住居址は原ノ辻下層式(須玖式)土器を出す。一九五一年におこなつた原ノ辻遺蹟の發掘については、次を参照。

水野清一、岡崎敬「臺岐原ノ辻彌生式遺蹟調查概報」(九學會編『對馬の自然と文化』一九五四年。

③⑫ 岡崎「臺岐における釜式土器の發見」(日本考古學協會 第十回總會研究發表要旨) 一九五二年。

③⑬ この問題について左の論攷がある。

青木正兒「粉食小史」(『華國風味』所收) 一九四九年。

原田淑人「中國粉食の起源」(『日本學士院紀要』七ノ二) 一九四九年。

③⑭ 碾磬の問題よりこれを取りあげたものに

西島定生「碾磬の彼方」—華北農業生産力展開史上の一問題—

(『歴史學研究』一二五) 一九四七年。

天野元之助「中國におけるうすの歴史」(『自然と文化』4) 一九五二年。

③⑮ 青木博士「粉食小史」(『華國風味』) 一七頁。

③⑯ 青木博士「愛餅の説」(『華國風味』) 四〇頁。

A Pan (鍋) and a Boiler (釜)

T. Okazaki

Among the miniature tools found in the tombs of Han Dynasty through T'ang Dynasty, the cooking utensil is a combination of Fu (釜) and Tsêng (甑). The narrow bottom of Tsêng is to be placed upon the top of Fu which is also very narrow. Placing a strainet between Fu and Tsêng, people steamed grains. At T'ang Dynasty, grains were boiled in a pan with a lid which is of almost the same shape that is used today. This change of cooking occurred when wheat, especially

in flour, became prevalent as staple food and they necessarily came to use a Pan with which they can cook meals not only by steaming, but also by boiling, frying and broiling.